

愛媛県における カワウソの保護の問題

森川 国康

オオカミについて滅びつつある日本の野
獣にカワウソがあることは衆知のことであ
るが、戦後香川県小豆島で発見された数頭
をのぞいて、最近その生息が知られたのは
ほとんど愛媛県下においてのみである。

昭和二十九年本県の脈川中流で一雌が発
見されて以来、確実な記録としては十五個
所からそれぞれ一頭ずつ（六雌、六雄、三
不詳）の発見があり（第一図）、そのうち五
頭のみ、かろうじて生きてとらえられた
が、他の十頭は全部死体となって発見され
ている。これは密猟の関係もあろうけれ
ど、同類の斗争によって傷つて倒れたも
のや、魚と間違つて刺されて発見されたの
が大部分である。生体の二雄と一雌は、
かつて松山市の道後動物園で飼育されてい
たが、いずれも病死してしまつた。現在、昭
和三十七年にとらえられた日振島の成雄と
城辺町大浜の幼雌が、まずまずの飼育条件
の改善された檻で、なかよく飼われている
状態である。

本県文化財専門委員会では昨昭和三十
七年十二月に、三崎半島以南に三地区を指定
し、県の特別保護区をもうけるようになった。
そして今年十月五日から五日間にわた
つて、文部省文化財保護委員会の鈴木外岐
雄博士と同省記念物課の品田稷河氏が現地



調査を行われ、いよいよ国の指定にまでこ
づつてきたようである。

カワウソという名はついでに、現在
本県で発見されるこの動物は、最初の発見
が河川域であった以外、みな海域から発見
され、ときには魚網にかかったりしたもの
であることは、この動物が開拓されてきた
河川では生息の場を失い、人跡のおよびが
たい海岸避地にかろうじて生き残っている
ということを示しているものと思われる。

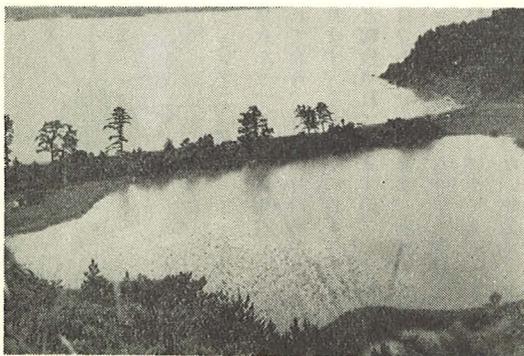
当地方に多い海蝕洞が、その生息地ではな
いかという考えが一時強かつたけれども、
著者の昭和三十六年における調査などでこ
れがほとんど望みうすことがわかつた。
それにしても今現在、推定生息数二十数頭
はこの海域に住んでいようという人があ

る。糞跡などの精査とホームレインジの大
いさ、年々の捕獲頭数などはこの程度の推
定におちるものであろう。

最も自然保護区として有望なのは八幡浜
市沖の地の大島という無人島である。ここ
にはウバメガシ、ハマヒサカキ、イヌビワ
などの木立や、ヨシで囲まれ、ハスなどの
はえこんだ周囲三百米くらいの大島が
あって（第二図）、地続きの大島の部落で
は迷信をおそれこの池に手を加える人もな
く、最も理想的な生息所を提供している。
ただ乾期になると鹹水化がおこり飲み水と
しては不条件であるが、魚も非常に豊富な
ことはいまでもない。

雨乞いの竜王神を祭つた小さいほらの
付近の葦や寝床の状態から見て、現在数頭
のカワウソの生息が確認されるのである
が、動物はこの池のみに棲むものではな
く、相当広い海域にわたつて行動範囲をも
っていることは知るべきで、この池を区切
つて飼育場を作るといふ考えは、あまり感
心できない。ただ目下話の進んでいるとい
う護岸工事（池のある谷は南東面海岸であ
り、台風に直面する所である）などはさけ
て、天然記念物指定により最低限ただ自然
のままの生息地の現状を保存し、カワウソ
を無断でとつてはならないという世論を高
めることさえできれば、まず満足されてよ
いものではなからうか。

いづれにしても記念物指定により、この
ような辺鄙な所に費用を投じ施設をして、
滅びつつある動物を保護することになるか
どうか問題であり、今後動物園に治療



第二図 八幡浜市 地の大島 竜王ヶ池全景
カワウソの自生息地として注目される

委託という名目で（狩猟許可がおりていな
い）飼育されている一つがいのカワウソを
もとにして飼育場を改善拡張し、積極的増
殖を行った方がよいということに致せない
ものかとも思うのである。カワウソは非常
に飼いやすい動物であるが、かつて動物園
で病死したものについては飼育条件がよく
なかつたのは事実である。
カワウソは本県南部の升網漁にもすでに
被害を与えているとも言われるし、密猟絶
減のおそれもないでなく、ますます人工が
加わり好生息地の自然の破壊が進んでいる
現状から見て、また動物の行動海域の広さ
から考えて、かりに幾つかの保護区を設け
ても、自然環境における動物の保護は非常
に困難な問題をもっていると思うのであ
る。
(愛媛大学文学部)